

2年学年だよい

小松市立板津中学校 No.13
令和2年 8月25日(火)

明日は今から変えられる

—コロナウイルス感染拡大から生まれる社会問題と向き合って—

昨日から2学期がはじまりました。板津中では全校で「コロナ差別をなくすために私たちはどうしたらよいのか」考えました。私たちにできることは小さなことかもしれません、まずは現状を知り、自分たちで考えることが、これから社会を生きるみんなにとって大切なことだと思います。みんなの感想を一部紹介します。

「あたたかい言葉が信頼を生む」

ニュースで看護師の子どもを保育園に通わせないでほしいというものを見たとき、その言葉が「ありがとう」や「おつかれさま」というねぎらいの言葉に変わっていたら、言われた看護師はどんなに楽だったかということを感じました。差別をなくすには互いに信頼することが大切だと思います。信頼していれば、もし自分がコロナになったとき、「この人なら励ましてくれる」「応援してくれる」と思って、言いやすくなると思います。そういう信頼される人になるには、日頃から患者さんへのいたわりの言葉や医療従事者の方への感謝を「言葉」にすることが大切です。それが難しいのなら、コロナウイルスについてや、患者さんや医療従事者の方の情報を簡単に話すべきではないと思います。

「声をかけて、ぬくもりを広げよう」

私の祖父には介護が必要です。そのため、ほぼ毎日介護をしてくださる人が、家に来ています。その人たちはクラスターになってしまった病院に関係があります。父はそれを知ったとき、とても心配になっていました。もし、祖父が感染してしまったらと思うと、怖いです。しかし、こんな状況の中でも、来てくださる人たちにとても感謝しています。なぜなら、その行動は「祖父のため」もありますが、「私たち家族のため」もあるからです。私たち家族にはできることに限界があります。介護してくださる人がいるからこそ、祖父は生きていけるし、私も幸せに生活できる気がつきました。

「人=コロナ」ではなく、その人を包み込むような言葉をかけ、そんな気持ちを持つ人がたくさんいる社会になるといいなと思います。私は私にできることの一つとして、介護してくださる人に「こんにちは」「ありがとうございました」と声をかけていきたいです。

「正しく知って、向き合いたい」

今、僕たちがコロナ対策でやっていることを徹底していても、いつどこにウイルスが潜んでいるのかは分からないし、相手が運ぶかも知れないという疑心暗鬼な気持ちになっているから、各地で差別や偏見が生まれているのだと思います。世の中は、そんな人ばかりではないと思いますが、皆、不安は心の中に絶対あると思うので、今から僕たちにできることは、自分たちのできるコロナ対策をしっかりとやって、コロナについての情報をたくさん収集し、人と向き合うときにその知識を生かして行動することです。このように生活すれば、少しでも不安が減って、コロナにかかった人、かかっている人への態度が変わってくると思うからです。僕は新聞やテレビで、コロナウイルスについての情報があつたら、最低限、記事を全て読んで、知識を増やしていきたいです。

「立ち止まって考えること」

差別をなくしていくには、どんなことでも一歩立ち止まって考えることが必要だと思いました。同じ年代のコロナウイルスの感染者がでるたびに、少し嫌な気持ちになるし、自分も感染したら嫌だなと思ってしまいます。しかし、感染した人々の立場になって考えると、そう思われることはすごく悲しいし、つらいと思いをすると思います。今まで、こんな風にしっかり考えたり行動したりしてこなかったけど、感染した方には「感染したくないから」と遠ざけるのではなく、あたたかい言葉を送ってあげたり、自分も気を付けようと自分の行動に目を向けたりして、一緒にがんばろうと前向きにコロナウイルスと闘っていくことが大事だと思いました。他人事から、自分事としてとらえて、自分が感染したらどうされたら、嬉しかったり、悲しかったりするのか、先を考えて行動していくと思います。

「『人』として、お互いに助け合う」

コロナウイルスに感染することは、とても怖いことだと思います。そして、コロナは自分たちの身近なところまで来ているので、怖いことは分かります。でも、そこでたまたま感染してしまった人をたたくのは、ただの差別になるので、してはいけないことだと思います。コロナウイルスは、それだけ対策を意識していても、感染してしまうことは十分あります。自分は感染しなかつただけで、でもこれから先自分も感染するのでは?と思うことは大事なので、張り詰めすぎで差別するのではなく、同じ人としてお互いに助け合っていけば、そうした差別が減ると思います。

そしてしっかりと感染対策をすることが、今の僕たちにできることではないのかなと思います。一刻もはやく、コロナ前の生活に戻れるように努力していこうと思いました。

「大人に頼らず、僕たちも仲間だから」

ぼくは差別やいじめをなくしていきたいなと思いました。今、この世界中が大変な中で、そんなことをしている場合ではないと思います。こんな時こそ、みんなで協力し、支え合う時だと思います。資料にあったように、「新型コロナウイルスは、人類にとって、大きな試練であり、人間性を問われるテスト」だということ。このテストでは、学校のテストどちらがいい、仲間がいます。その仲間を見捨てることは、自爆していることと同じだと思います。病院で、コロナウイルスの手当をしてくださる方々も命がけです。そんな人たちを差別するのではなく、逆に感謝するべきだと思います。互いに思いやって、新型コロナウイルスを少しでも早くおさめるために、行動していくべきです。大人にたよらず、自分たちも少しでも意識していけたいなと思います。

みんなの感想は、どれも真剣で、あたたかいものでした。身近な日常生活とはちょっと違ひ、社会全体の問題についても一生懸命向き合う姿に、みんなの成長を感じました。

板津中ともつながりのある、広島の被爆者 石原智子さんは、「平和な世界をつくるためには、クラスや学校、地域、家庭など身近で小さい世界で幸せを感じ、平和をつくることが大切」と言っていました。私たちにできることは「思いやりある集団」としてさらに成長することでもあります。みんなの真剣で「ぬく～い」思いを、行動にうつし、学校や地域全体へ発信しよう!

「私たち板津人はコロナに負けない」ということで、「七つの誓い」をたてました。別紙で伝えますので、家族の人にも紹介してください。



人類にとっての これだけはゆずれない! 大きな試練

共に乗り越えたい!

昨日から2学期がはじまりました。始業式を終えて、2時間目の道徳では、今、社会で問題になっている「コロナ差別」について、校長先生の話や新聞の資料から考えました。今私たちが抱えるのは、コロナウイルスという感染症への恐怖なのか、はたまた差別への恐怖なのか。いわくなき差別という、問題について向き合いました。みんなの感想も一部、紹介します。

「己の欲せざるところ、人に施すことなれ」

私は、新聞記事の「安心して感染したい」について、最初はよく理解していませんでした。でも、もし自分が感染してしまったらと思うと、周りから差別されたくない感じ、不安になると思ったので、その言葉の意味が理解できました。

もし、周りの人が感染してしまったら、私はその人を差別するような言動はひかえたいと思っているけど、実際その状況になったときは正直、分かりません。だから私は、人を責めるのではなく、みんなで助け合っていく社会であってほしいです。例えば、医療従事者の家族が自分の周りにいて「来るな」とは言わず、その人やその医療従事者の方へ感謝を述べるべきだと思います。「自分がされたり、言われたりして嫌なことは相手にはしない」ということを、みんなでやっていけば、その中で思いやりが生まれると思います。

「内なる偏見に気付く」

私は、差別の現状を知って、同じ習い事に通う子の母親を思い浮かべました。その母親は小松市内の病院で働いています。クラスターが発生したとき、私は習い事をしていましたが、その母と子どもも家に帰っていました。そのとき少し、申し訳なさそうな顔をしていました。私はそれが当たり前のことだと思ってしまいました。そしてコロナ差別や、いじめを軽く見ていましたと感じました。

今、わたしたちにできることは、私の場合その子をあたたかく迎えることだと思っています。「大丈夫やったか?」「また練習しような!」など声をかけて、心配や不安を和らげることが大切だと思います。思いやりとは、相手の身体や心に気を配って行う行動だと思うので、私も思いやりのある行動を常に行っていきたいと思いました。

人類にとって大きな試練であり、
人間性を問われるテスト



「とにかく、いろいろ想像してみる」

僕は、コロナ差別を知って、なんで差別するんだろう?と思いました。ニュースで県外ナンバーの車が壊されたのを知って、僕は壊さなくてもいいと思いました。たぶん、誰もコロナをうつそうとしていると思います。とても大事な用事があったのかもしれないし、車を県外で買っただけかもしれない。その人のことを知らないのに、車を壊すのはおかしいと思う。

無駄な外出はひかえて、一人ひとりが手洗いやうがいなどを徹底することで感染はあまり広がらないと思う。コロナウイルスに関係なくとも、相手のことを思いやることは、相手のためでもあり、自分のためにもつながると思う。

「思いやりとは受け入れること」

私にできることは、コロナになった人でもあたたかい気持ちで受け入れることが大切だと思いました。自分も「この人、コロナなんじゃない」と言葉にはしませんでしたが、心の中で思ってしまったことが何度かありました。でも、今になって、自分を振り返ると、なんでこんなことを思ってしまったのだろうと後悔しました。

もし、自分が…、友達が…、家族が…と考えると、私はどうしていいか分からなくなると思います。だから簡単なことからはじめようと思います。コロナウイルスに感染した人も、そうでない人も関係なく受け入れます。前までは「なんでこの人コロナにかかったん。また増えるやん」とネガティブに考えてしまっていましたが、これからは少しでもその人たちのことを考え、相手の気持ちがやわらぐような、楽になるような努力をしていこうと思いました。

「考える間に、ぬくもりを込めて、言葉を発する」

今回の話を聞いて、小松市でのクラスターなどがでてくるまでは、コロナなど遠い存在でしかなかったけど、いざこうなるとコロナはいつ、どこで、かかるか、分からない現状で、小松市で初めてかかった中学生の人は、学校や周りから差別されるのではないかなど、いろいろなことが頭の中で、考えが浮かびました。感染したくなくてもかかってしまう病気でもあるので、周りの人で感染してしまった人がいるならば、その人について考えなしで、思いのない言葉を発するのではなく、一度考えてから言葉を言ったり、相手の気持ちを考えて行動することが一番大切だと思います。

学年便りでも紹介しましたが、真剣に話を聞いて考える姿に、みんなの成長を感じました。みんなの作文で印象に残ったことが、まず「正しい知識を知ることからはじめたい」ということです。自分とは関係ないように感じることでも、「知ろう」とすることが第一歩です。また、「対策をしっかりすること」という意見も納得しました。面倒くさく思うこともあるでしょうが、「事前>事後」の考え方には、危機管理のうえで大切なことです。

みんなの考えてくれた「思いやりある行動」は、コロナウイルスとは関係ない場でもできることばかりでした。今回、作文を書いただけで終わらせるのではなく、思いやりある集団にするために、自ら行動をとってくれることに期待します。共に困難を乗り越える仲間として、高めあいましょう。

